

## For certes, for soothly, for truly, etc.: その 構造と意味

近藤, 健二  
九州大学教養部 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/6796151>

---

出版情報 : 言語科学. 11/12, pp.37-47, 1976-03. 九州大学教養部言語研究会  
バージョン :  
権利関係 :



## For certes, for soothly, for truly, etc.

—その構造と意味—

近 藤 健 二

1. 本稿の目的は、次の下線部のような形がいかなる構造と意味を有するかを考察することにある。

- (1) And forasmuche as a man may acquiten hymself biforn God by penitence in this world, and nat by tresor, therefore sholde he preye to God to yeve hym respite a while to biwepe and biwailen his trespass. ①For certes, al the sorwe that a man myghte make fro the bigynnyng of the world nys but a litel thyng at regard of the sorwe of helle. The cause why that Job clepeth helle the lond of derknesse; understondeth that he clepeth it “lond” or erthe, for it is stable, and nevere shal faille; “derk,” for he that is in helle hath defaute of light material. ②For certes, the derke light that shal come out of the fyr that evere shal brenne, shal turne hym al to payne that is in helle; for it sheweth him the horrible deves that hym tormenten. “Covered with the derknesse of death,” that is to seyn, that he that is in helle shal have defaute of the sighte of God; ③for certes, the sighte of God is the lyf perdurable. “The derknesse of death” been the synnes that the wrecched man hath doon, whiche that destourben hym to see the face of God, right as dooth a derk clowde bitwixe us and the sonne. (それに、財宝ではなく、ごんげによって人は現世のうちに神の前で自分を無罪放免することができるから、自分の罪を嘆き悲しむために一時の猶予をくださるように神に祈るべきである。実際、世界が始って以来、人が耐え得るようないかなる悲しみも地獄のそれと比べたら取るに足らないものなのだ。ヨブがなぜ地獄を「暗黒の地」と呼んだかについては、それが堅固で果てしなく続くからそれを「地」すなわち大地と呼んだのであり、地獄にいる者は光を発する物を持たないからそれを「暗黒の」と呼んだのだということを理解しなさい。実際、永遠に燃える火からやって来る黒い光が地獄にいる者をひどく苦しめるのだ。というのは、その光が彼を苦しめる恐ろしい悪魔に彼をさらすからである。「死の暗やみにおおわれている」とは、地獄にいる者には神の姿が見えないということである。実際、神の姿には永遠の命があるにもかかわらず。「死の暗やみ」とは、あわれな人間が犯した罪であり、丁度私達と太陽との間に現われる黒い雲のように、それが彼に神の顔を見えなくするのだ。)——Chaucer, *C.T.*, I. 178-84.<sup>1)</sup>

For certes という形は、筆者が調査した限りでは Chaucer 以外にはほとんど現われないものである。いうまでもなく certes は ‘certainly’ を意味する副詞であるから、常識的には、その前に位置する for は前置詞ではあり得ない。そうだとすれば、この for は接続詞であろうか。むろん、前の陳述に対して付加的・補足的な理由・説明・根拠などを述べる際に用いられる接続詞であり、日本語に訳すとすれば、「というのは」「というわけは」「なぜかという」と

のようにいえるものである。ところが実際はどうであろうか。(1)における下線部①②③を文脈の上から調べることから始めよう。

2. まず下線部①の *for* についていえば、それを「というのは」と訳してさしつかえないであろう。*For certes* につづく文が、それに先行する文に対して補足的な根拠を述べているとみなし得るからである。ところが下線部②の場合はどうであろうか。*For* を「というのは」と訳してしまつては文章のリズムが狂ってしまうであろう。“*the derke light . . . shal turne him al to peyne*”は“*he that is in helle hath defaute of light material*”に対する理由でも根拠でもないように思われるからである。両者を接続詞 *for* で結べば文章の流れが不自然にならざるを得ない。②の *for* が理由を表わす接続詞であるとしたら、その直後に“*for it sheweth . . .*”と同じ理由を示す節が続くのも不自然である。②の部分に何らかの接続詞を強いて挿入するとすれば *and* 以外にはないであろう。

*For certes* における *for* が理由や根拠を表わす接続詞でない点は、下線部③において一層明らかである。“*for certes, the sighte of God is the lyf perdurable*”を接続詞を使って現代英語にパラフレーズすれば、“*though the sight of God is certainly life everlasting*”となろう。むしろ関係代名詞を使って“*which is certainly life everlasting*”のようにしてもよい。

3. 以上で明らかになったことは、例文(1)における②③の *for* には理由・根拠を表わす接続詞としての意味がないということだけであり、その *for* がいかなる意味を有するのか、*for certes* という結合がいかなる構造を有し、いかなる契機を経てできたかについてはまだわからない。さらに①が②③と同じものであるかどうかさえわからない。というのは、①における *for* を「というのは」と訳し得るのは確かであるが、強いてそう訳さねばならない理由はなく、実際それを無視しても意味内容にはほとんど影響ないからである。

これに対して稀ではあるが、次の例のように *for* が明確に理由・根拠を表わすために用いられていると思われる場合もある。

- (2) *Ther shul we han a juge that may nat been deceyved ne corrupt. And why? For, certes, all oure thoghtes been discovered as to hym; ne for preyere ne for meede he shal nat been corrupt.* (われわれはそこで一人の裁判官を持つが、彼はだまされも買収されもしない。それはどうしてか? なぜなら、実際われわれの考えがすべて彼にはわかり、祈りによつても、いろいろによつても彼を買収することはできないからである。)——*Ch., C.T., I. 166.*

この場合に限って、*F. N. Robinson, W. W. Skeat* ともに *for* の次にコンマを入れているが、これは *for* の接続詞としての意味を明示するためと思われる。*Robinson* はこの他にもう一例次のように *for* と *certee* を区切っているが、この *for* には理由を表わす意味はなさそうである。もっとも、この部分は *Robinson* もいうように陳述の内容が“*confusing*”などころなので明確なことはいえない。

- (3) *And now, sith I have declared yow what thyng is Penitence, now shul ye understonde that ther been three acciouns of Penitence. The firste is that if a man be baptized after that he hath synned, Seint Augustyn seith, “But he*

be penytent for his olde synful lyf, he may nat bigynne the newe clene lif." For, certes, if he be baptized withouten penitence of his olde gilt, he receyvethe the mark of baptesme, but nat the grace ne the remission of his synnes, til he have repentance verray. (今や私は、ざんげとはどんなものかを述べたから、あなたがたはざんげに関する三つのがめがあることがわかるであろう。第一のがめは、人が罪を犯した後に洗礼を受けるということである。聖オーガスタンはこういつている。「もし人が自分の昔の罪深い生活を悔いることをしなければ、新しい高潔な生活を始めることはできない。」実際、彼が昔の罪に対する後悔なしで洗礼を受けたならば、洗礼の印を受けたことにはなっても、本当に後悔するまでは神の恩寵も自分の罪の赦免も受けることはない。)——Ch., C.T., I. 94-7.

Chaucer 以外では、for certes の例を筆者は次の一つしか知らない。

- (4) Toby says, "take yt to no greue, for sertes I asked yt for non yll." (トビーはいう。「それを悪くとらないでくれ。悪意があつて質問したのでは全然ないから。)」——*A Middle English Metrical Paraphrase of the Old Testament*, stanza 1305. (ed. U. Ohlander)

(4)では、for の後の部分が前の部分に対する理由を表わす文となっていることは明白である。

4. For certes と同じ構造と意味を有すると思われるものとして、for soothly という形が Chaucer にある。

- (5) Of this roote eek spryngeth a seed of grace, the which seed is mooder of sikernesse, and this seed is egre and hoot. The grace of this seed spryngeth of God thurgh remembrance of the day of doom and on the peynes of helle. Of this matere seith Salomon that in the drede of God man forleteth his synne. The heete of this seed is the love of God, and the desiryng of the joye perdurable. This heete draweth the herte of a man to God, and dooth hym haten his synne. ①For soothly ther is nothyng that savoureth so wel to a child as the milk of his norice, ne nothyng is to hym moore abhomynable than thilke milk whan it is medled with oother mete. Right so the synful man that loveth his synne, hym semeth that it is to him moost sweete of any thyng; but fro that tyme that he loveth sadly oure Lord Jhesu Crist, and desireth the lif perdurable, ther nys to him no thyng moore abhomynable. ②For soothly the lawe of God is the love of God; for which David the prophete seith: "I have loved thy lawe, and hated wikkednesse and hate"; he that loveth God kepeth his lawe and his word. (この根からも恩寵の種が生まれる。この種は息災の母である。またこの種は熱く燃えている。この種の恩寵は審判の日と地獄の罰を想起することによって神から生ずる。このことについてソロモンは「神を恐れてこそ人は罪を逃れる」といつている。この種にある熱は神への愛と永遠の喜びに対する熱望である。この熱が人の心を神にひきつけ、彼をして罪を憎ませるのだ。実際、子供にとっては乳母の乳ほどおいしいものはないし、他の食物と混ぜられた時のその乳ほどまずいものはないのだ。丁度そのように、自分の罪を愛する罪深い者にとっては、罪がすべてのうちで一番うまいものなのである。だが彼がわれらの主イエスキリストを真剣に愛し、永遠の生を欲するようになる時から、彼にとってそれほど忌むしいものはなくなるのだ。実際、神の律法は神の愛である。だからダビデもこういつている。「私は汝の律法を愛し、悪と憎しみを憎んだ。」神を愛する者は神の律法と神の言葉を守るのだ。)——Ch., C.T., I. 116-24.

文脈から考えて、(5)における下線部①②の for はいずれも理由を表わす接続詞ではなからう。しかし次の(6)における二つの下線部のうち①の for は「というのは」と訳すことも可能な文脈に用いられている。

- (6) And therefore, he that wolde sette his entente to thise thynges, he were ful wys; ①for soothly he ne sholde nat thanne in al his lyf have corage to synne, but yeven his body and al his herte to the service of Jhesu Crist, and therof doon hym hommage. ②For soothly oure sweete Lord Jhesu Crist hath spared us so debonairly in oure folies, that if he ne hadde pitee of mannes soule, a sory song we myghten alle synge. (だから、心をこれらのことに向けている人は非常に賢い。[というのは]実際、彼は終身、罪を犯そうなどという気持を起こさずに、自分の身と心のすべてをイエスキリストに捧げ、そうすることによって彼に敬意を示すに違いないからだ。実際、われらの愛する主イエスキリストは私達の愚行をあまりに慈悲深く許してくださった。だから、もし彼が人間の魂に憐れみをかけてくださらなかったならば、私達はみな悲しい歌を歌うことになるであろう。)——Ch., C.T., I. 313-4.

For certes, for soothly に類するものとして、for certainly, for truly, for naturally という形が見つかる。次の例はいずれも、for が理由を表わす接続詞として用いられているとみなしてよい、あるいはみなさなければならぬ場合である。

- (7) Swiche wordes seith my peple, out of drede. Wel oughte I of swich murmur taken heede; For certainly I drede swich sentence, Though they nat pleyn speke in myn audience. (人民はそんな言葉をきくと吐く。私としてはそのような不満を十分注意すべきなのだ。[というのも]実際、彼らは私のいるところでははっきりいわないが、私にはそんな意見が心配に思われるからだ。)——Ch., C.T., E. 634-7.

- (8) And wel I woot, as ye goon by the weye, Ye shapen yow to talen and to pleye; For trewely, confort ne myrthe is noon To ride by the weye dounb as a stoon; (ところで道中はまたきつと昔話や冗談話でにぎわうことでございましょう。[というのも]実際、石のように黙って旅をしていたんでは面白くもおかしくもありませんからね。)——Ibid., A. 771-4.

- (9) He was war of this fox, that lay ful lowe. Nothyng ne liste hym thanne for to crowe, But cride anon, “Cok! cok!” and up he sterte As man that was affrayed in his herte. For naturelly a beest desireth flee Fro his contrarie, if he may it see, Though he never erst hadde seyn it with his ye. (彼は隠れていたこの狐に気づいた。彼は鳴き声をあげるつもりはなかったのだが思わずコッコと叫んで、びっくりした人間のように飛び上がってしまった。[というのは]当然のことはあるが、この鶏は初めて狐を見たのだけれど、動物というのは敵を見ると逃げたがるものだからだ。)——Ibid., B. 4465-71.

5. すでに引用した例からもわかるように、for certes や for soothly が文頭以外に現われることは決してない。そこでこの for は、理由を表わす等位接続詞として機能するのがおそらく本来の用法であったように思われる。そして、それが理由を表わし得ないような文脈にも使われるようになった原因としてまず考えられるのは、for certes などにおける for の意味が薄弱であったこと、いいかえれば、等位接続詞としての for の情報内容が少なかったということ

である。情報量が少ないということは、例えば次の二文がほとんど同じ意味内容を有することからも理解されよう。

A. I will not go out, for it is raining.

B. I will not go out; it is raining.

For certes や for soothly における for は、ただでさえ弱い意味しか持たない上に、すぐに強意語としての certes や soothly があるために、一層その意味が弱まることになったと思われる。この傾向はさらに、次に示すような for sooth (=soothly) や for certain (=certainly) の影響によって助長されたかもしれない。

(10) For sothe he was a worthy man with alle, But, sooth to seyn, I noot how men hym calle. (実際のところ、彼はその上立派な男であったが、世間の人々が彼をどう呼んでいるのか、正直なところ私は知らない。)——Ch., C.T., A. 283-4.

(11) Suppose ze þen þat all sall sew as he has sayd yow for certayn! (そのときには、彼が確かにいった通りにみんな信じると思いなさい。)——A ME. Metr. Paraphr. of the Old Test., stanza 979.

For sooth, for certain は、いうまでもなく前置詞 for が名詞 sooth, certain を目的語としている構造である。しかし sooth も certain も、-ly の語尾なしにそのまま副詞として使われることもあったので、for sooth, for certain が場合によっては for certes, for soothly, for certainly などと同じ構造であると思われたかもしれない。例えば、次の二つの例における for は前置詞であるのか接続詞であるのか判定し難い。

(12) Then seid Marie, “whi seist þou so? for sothe, thogh y go be-fore, yet shal thu not be for-lore. (それからメアリーはいった。「なぜあなたはそういうのですか。確かに私は先に行きますけれど、あなたは決して見捨てられるのではないのですから。’)——The Assumption of Our Lady (Harl. MS. 2382), 258-60. (EETS. os. 14)

(13) By this proverbe thou shalt understonde, Have thou ynogh, what thar thee recche or care How merily that othere folkes fare? For, certeyn, olde dotard, by your leve, Ye shul have queynte right ynough at eve. (この格言によってあなたも悟りなさい。自分が十分持っていれば、他の人々がいかに楽しくやっているかをなぜ気にする必要がありますか。実際のところ、失礼ながら老いぼれさん、夜にはあなたもきっと楽しいことをしているんでしょから。)——Ch., C.T., D. 328-32.

For sooth, for certain に類するものとして for sure という形があるが、次の例における for sure の for は接続詞というべきかもしれない。

(14) Friend, thou doest me wrong to suspect me, for sure I never heard him otherwise called than Erostrato. (僕を疑うなんて君、ひどいじゃないか。本当に、彼がエロストラトー以外の呼ばれ方をしたのを一度だって僕は聞いたことがないんだから。)——George Gascoigne, *Supposes*, IV. vii. 43-4.

For sooth, for certain などと for soothly, for certainly などとは形態も意味も、またそれらが使われる文脈も非常に似かよっていたので、本来は前置詞であったものが接続詞に、接

続詞であったものが前置詞に感ぜられることがあったとしても不思議ではない。このように、for soothly などの形が副詞を目的語とする前置詞句のように感ぜられることもあったかもしれない。<sup>3)</sup>これは十分あり得ることである。というのは、次のように前置詞が目的語として副詞を従えることは珍しくなかったからである。

- (15) quat ha we don we let þus þis folk awai, þat suld vs serue for euer and ai?  
(いつまでも私達に仕えるはずのこの人民を離れさせてしまったとは、私達は一体何を  
したというのだ。)—*Cursor Mundi* (Cotton MS.), 6216-8.

一方、For certes や for soothly の for が理由を表わす接続詞としての機能を有しない場合には、for は一種の強意語として機能することもあったはずである。すでに OE の時代から for, for- は次のように強意接頭辞として “very” の意味で使われていたからである。<sup>4)</sup>

- (16) And he fór eft ofer Iordanen, to ðære stówe de Iohannes wæs and ærest  
on fullode (そしてイエスはまたヨルダンを越えて、ヨハネが以前いて初めてバプテスマ  
を授けたところへ行った。)—*Anglo-Saxon Gospels, John x. 40.*<sup>5)</sup>
- (17) His longe heer was kembd bihynde his bak; As any ravenes fethere it shoon  
for blak<sup>6)</sup> (その頭髮は櫛でとかれて背中に垂れ下がっており、鳥の羽根のように真黒く  
輝いていた。)—Ch., C.T., A. 2142-4.
- (18) I payed for hard mete ever to hym. (彼にはもう、とても固い肉を支払ったので  
す。)—1481-4 *Paston Letters*, 975. (ed. J. H. Gairdner)

6. For certes や for soothly などの形が使われるようになったのは、筆者の調査によれば Chaucer からであり、理由を表わす接続詞としての意味を欠如させた for が現れるのも Chaucer からである。しかし Chaucer 以外には、聖書に for truly, for verily という形がしばしば見られるほかはほとんど使われた形跡はない。ここでは、聖書におけるその形の構造と意味、およびその由来を探るため、問題となる箇所を Tyndale から引用し、それを Anglo-Saxon Gospels (=A.-S. Gosp.), Authorized Version (=AV), Revised Standard Version (=RSV), New English Bible (=NEB), およびギリシア語、ラテン語の各 version の該当箇所と比較しながら検討する。次に引用するいくつかの例を考察するにあたって、ラテン語聖書 Vulgate はギリシア語から、OE 訳の A.-S. Gosp. (c 1000年) と Wycliffe 訳 (1389年) はラテン語から訳され、Tyndale 訳 (1526年) と AV (1611年) はギリシア語聖書に極めて忠実に訳されているということ、そして RSV (1952年) はアメリカ標準訳 (American Standard Version, 1901年) と AV を基礎とした改訂訳であり、NEB (1961年, 1970年) は現代英語散文の模範ともいわれているものであるということらを考慮に入れておく必要がある。

- (19) *Matt. v. 17-18.*

Tyndale: Ye shall not thynke that I am come to disanull the lawe, or the prophets; no I am nott come to disanull them, but to fulfyll them. For truely I saye vnto you, till heven and erth perisshe, one iott, or one tittle, of the lawe shall not scape, tyll all be fulfilled. (私が律法や予言者を廃するために来たと思っ  
てはならない。廃するためでなく、成就するために来たのである。本当によく  
いっておくが、天地が滅びゆくまでは律法の一点、一画も廃することはなく、ことごと

く全うされるのである。)

A.-S. Gosp.: . . . Sóþes on eornost ic secge eow . . .

Wycliffe: . . . Forsothe I say to 3ou trewthe, . . .

AV: . . . For verily I say unto you, . . .

RSV: . . . For truly, I say to you, . . .

NEB: . . . I tell you this: . . .

Greek: . . . ἀμῶν γὰρ λέγω ὑμῖν, . . .

Vulgate: . . . Amen quippe dico vobis, . . .

(20) *Matt.* v. 19-20.

Tyndale: Whosoever breaketh one of these lest comaundmentes, and shall teache men so, he shallbe called the leest in the kyngdome off heven; but whosoever shall observe, and teache then, that persone shalbe called greate in the kyngdome off heven. For I saye vnto you, except youre rightewesnes excede the rightewesnes off the scribes and Pharises, ye cannot entre into the kyngdome off heven. (それだから、これらの最も小さい戒の一つでも破り、またそうするように人に教えたりする者は天国で最も小さい者と呼ばれるであろう。しかし、これを行い、またそう教える者は天国で大いなる者と呼ばれるであろう。よくいっておくが、あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義に勝っていなければ決して天国に入ることはできない。)

A.-S. Gosp.: . . . Sóþlice ic secge eow, . . .

Wycliffe: . . . Forsothe Y say to 3ou, . . .

AV: . . . For I say unto you, . . .

RSV: . . . For I tell you, . . .

NEB: . . . I tell you . . .

Greek: . . . λέγω γὰρ ὑμῖν . . .

Vulgate: . . . Dico enim vobis, . . .

(21) *Matt.* x. 23.

Tyndale: When they persente in wone cite, flye in to another. I tell you for a treuth, ye shal nott fynysse all the cites of Israhel, tyll the sonne of man be come. (一つの町で迫害されたら他の町へ逃げなさい。本当にいっておくが、あなたがたがイスラエルの町々を回り終らないうちに、人の子は来るであろう。)

A.-S. Gosp.: . . . Sóþlice ic eow secge, . . .

Wycliffe: . . . Trewly I saye to 3ou, . . .

AV: . . . : for verily I say unto you . . .

RSV: . . . ; for truly, I say to you . . .

NEB: . . . I tell you this: . . .

Greek: . . . ἀμῶν γὰρ λέγω ὑμῖν, . . .

Vulgate: . . . Amen dico vobis . . .

(22) *Matt.* xvii. 19-20.

Tyndale: Then came hys disciples secretly, and sayde, Why could not we cast him out? Jesus sayd vnto them, Because off youre vnselfe. For I saye verily vnto you, yff ye had faythe, as a grayne off musterd seed, ye shuld saye vnto this mountayne, Remeve hence to yonder place, and he shulde remeve; nether shuld eny thyng be vnpossyble for you to do; (それから、弟子達が密かにイエスのもとに来ていった。「私達は どうして 霊を 追い出せなかったのですか。」するとイエスはいわれた。「あなたがたの信仰が足りないからである。本当によくいっておくが、もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この山に向って『ここからあそこに移れ』といえ、移るであろう。このように、あなたがたにできないことは何もないであろう。)

A.-S. Gosp.: . . . Sóþlice on eornost ic eow secge, . . .

Wycliffe: . . . Treuly I seie to 3ou, . . .

AV: . . . : for verily I say unto you, . . .

RSV: . . . For truly, I say to you, . . .

NEB: . . . I tell you this: . . .

Greek: . . . ἀμὴν γὰρ λέγω ὑμῖν, . . .

Vulgate: . . . Amen quippe dico vobis . . .

(23) *Mark* ix. 41.

Tyndale: And whosoever shall geve you a cuppe off water to drinke for my namys sake, be cause ye are belongynge to Christe, verely I saye vnto you, he shall not loose his rewarde. (また誰でも、キリストについている者だというのであなたがたに水一杯でも飲ませてくれるものは、よくいっておくが、決してその報いからもれることはないであろう。)

A.-S. Gosp.: Sóþlice . . . ic eow sóþ secge, . . .

Wycliffe: Sothli . . . , treuly I seie to 3ou, . . .

AV: For . . . , verily I say unto you, . . .

RSV: For truly, I say to you, . . .

NEB: I tell you this: . . .

Greek: . . . γὰρ . . . ἀμὴν λέγω ὑμῖν . . .

Vulgate: . . . enim . . . amen dico vobis . . .

(24) *Mark* xi. 22-23.

Tyndale: And Jesus answered and sayde vnto them, Have confidens in God; Verely I sye vnto you, that whosoever shall saye vnto this mountayne, Take away thy silfe, and cast thy silfe in to the see; and shall not waver in his herte, butt shall beleve, that those thinges which he sayeth, shall come to pass, what soever he sayeth, shalbe done vnto him. (イエスは答えていわれた。「神を信じなさい。よくいっておくが、誰でも、この山に動き出して海の中に入れといい、そのいったことは必ず成ると心に疑わないうて信じるなら、その通りに成るであろう。)

A.-S. Gosp.: . . . Ic secge eow to sóþe, . . .

Wycliffe: . . . Treuli I seie to 3ou, . . .

AV: . . . For verily I say unto you, . . .

RSV: . . . Truly, I say to you, . . .

NEB: . . . I tell you this: . . .

Greek: . . . ἀμήν λέγω ὑμῖν . . .

Vulgate: . . . amen dico vobis . . .

(25) *John* iii. 3.

Tyndale: Josus answered, and sayde vnto hym. Verely, verely, I saye vnto the, except that a man be boren a newe, he cann se the kingdom of God.

(イエスは答えていわれた。「よくよくあなたにしておくが、誰でも新しく生まれなければ神の国を見ることはできない。)

A.-S. Gosp.: . . . Sōþ, ic ðe secge, . . .

Wycliffe: . . . Treuli, treuli, I seie to thee, . . .

AV: . . . Verily, verily, I say unto thee, . . .

RSV: . . . Truly, truly, I say to you, . . .

NEB: . . . In truth, in very truth I tell you, . . .

Greek: . . . ' Αμήν ἀμήν λέγω σοι, . . .

Vulgate: . . . Amen, amen dico tibi, . . .

さて、上記の Tyndale, AV, RSV に現われる for truly または for verily という形は、まぎれもなくギリシア語 ἀμήν γάρ を訳したものである。従って、ἀμήν γάρ を調べれば for truly, for verily の意味もわかろうが、ἀμήν が 'truly' を意味するのに対し、γάρ には接続詞としての 'for' と、強意語としての 'truly' の二つの意味があるからやっかいである。

γάρ に 'truly' と 'for' の意味があるということは、次の二つのことを意味するであろう。すなわち一つは、'truly' と 'for' の意味が全く異質のものではないということである。<sup>7)</sup> もう一つは、'truly' 'for' のどちらとも判断しかねるような使われ方をしている γάρ, 換言すれば、そのどちらの意味も兼ね備えていると思われるような γάρ がおそらく存在したということである。<sup>8)</sup> そうであれば、上記(19)~(23)に見られるギリシア語 γάρ を 'truly' 'for' のいずれにも解し得たとしても不思議ではなく、翻訳者によってその訳し方が異なることもあり得たであろう。そして γάρ が for と訳された場合にも、翻訳者の意図がどうであれ、それが 'truly' の意味に解されることもあったであろう。なぜなら、すでに述べたように ME では for, for- が強意語として使われることも事実あったからである。for が強意語的性格を持ち得たことは、(20)のように for が γάρ の訳として単独に現われる場合についてもいえよう。

Tyndale は ἀμήν γάρ を訳すのに、(22)のように for と verily を分離させているので、彼としては γάρ を理由を表わす接続詞として理解しているように思われるかもしれない。しかし(21)のように、ἀμήν γάρ を for a truth と一まとめに訳したり、(23)のように γάρ を and に訳したりしている場合もあるから断定はできないのである。AV についてもほとんど同じことがいえよう。AV では、ἀμήν γάρ はほとんど例外なしに for truly, for verily となっているが、(24)のように ἀμήν のみを訳す場合にも for verily と二語に訳していることもある。

ラテン語聖書 Vulgate における quippe や enim にも, ‘truly’ と ‘for’ という微妙に異なる二つの意味があり, ギリシア語 γάρ と同様その表わす意味は不明瞭である。<sup>9)</sup> しかしそのラテン語を訳した A.-S. Gosp. と Wycliffe におけるその意味のとり方は明確である。両者においては, quippe と enim は疑いもなく ‘truly’ の意味に解されている。このことは, その訳に for が使われていないことから明白である。(19)や(22)の amen quippe は, (25)の amen amen とほぼ同じように, すなわち意味を強調するために同じ意味の二語を繰り返した形のようにみなされたであろう。事実, A.-S. Gosp. には (19), (22) のように quippe がはっきりと on eornost (=‘truly’) と強意的に訳されている例もあるのである。

以上のように, 上記 (19)~(24) に見られる Tyndale, AV, RSV における for は明らかにギリシア語 γάρ に由来するが, その意味は, おそらく強意語的性格を有するものとして漠然としかわからない。むしろ, for の実体そのものが漠然としたものであるというべきかもしれない。確かであることは, 文脈の流れ, 文脈のリズムという観点からいえば, この for を「というのは」という意味の接続詞とみなすことがはなはだ不自然な場合が多いということ, そして NEB からの引用によっても推察できるように, この for は現代英語の散文には全くなじみがないものだという点である。問題の for が聖書に現われるのは, ‘for truly I say to you’ とか ‘for I tell you’ とかいった一種の誓言 (swearing) とでもいい得るような場合に限られ, 訳者が意図した for の意味がどうであれ, それを読む読者は, 特に意識しない限り, それを純然たる接続詞と感ずることはなかったであろう。そしてまた, それを純然たる強意語と感ずることもなかったであろう。というのは, この種の for が文中に使われることは一度もなかったからである。

#### 注

- 1) Chaucer の例は次のテキストから引用した: *The Complete Works of Geoffrey Chaucer*, ed. F. N. Robinson. London (Oxford U. P.), 1957<sup>2</sup>.
- 2) Robinson が For, certeyn とコンマをつけているのは明らかに for を接続詞とみなしたためである。しかしこの for が前置詞でないという証拠はない。参考までに, Skeat 版ではコンマがつけられていないので Skeat が for を接続詞, 前置詞のいずれにみなしたかはっきりしない。
- 3) For soothly が時には for sooth と同じ構造・意味を有すると感ぜられることもあったであろうが, 常にそうであったわけではない。このことは, for sooth が文頭, 文中いずれにも使われたのに対し, for soothly は文中では決して使われなかったという事実から明らかである。
- 4) 副詞 sooth, certain, ever よりも副詞句 for sooth, for certain, for ever の方が意味が明瞭かつ強意的であるという点で, これらの for も強意語的性格があるといえる。この意味では, Poutsma (*Gram. of Late Mod. Eng.*, XXXIV, 30) が “superfluous or inorganic” な前置詞としている for oneself (独力で) という句における for も強意語的性格を有するといえよう。さらに, OED (For, B, 5) が “For and=‘and moreover’. Obs.” としている for and における for も強意的である。
- 5) 次のテキストより引用: *The Gothic and Anglo-Saxon Gospels in Parallel Columns with the Versions of Wycliffe and Tyndale*, ed. J. Bosworth & G. Waring. London (Reeves & Turner), 1888. なお, Wycliffe, Tyndale の例もこのテキストによった。
- 6) この種の形の説明については, 議論が二つに分れている。一つは「強意接頭辞+形容詞」であるという説明であり, もう一つは「前置詞+(名詞化した)形容詞」という説明である。Chaucer に現われる例に限って言えば, Skeat は前者のごとく解釈しているが, Robinson は後者に解すべきであるという。

この点については、次に引用する T. F. Mustanoja (*A Middle English Syntax*, p. 381) の説明が参考になる：“The most probable explanation is that *for*, originally an intensifying prefix, is in later ME frequently mistaken for a causal preposition combined with a semi-substantivised adjective. This is one of the consequences of the general decay of the old prefixes, even of *for-*, although it retains its vitality longer than most of the others. Once *for* is taken as a preposition, the type becomes exposed to the influence of parallel foreign uses.”

- 7) この二つの意味のうち的一方の意味は、他方の意味がおそらく拡大することによって生じたものだからである。
- 8) 日本語でも、たとえば次の下線部は ‘truly’ という強意語的性格と ‘for’ という接続詞的性格を兼ね備えているように感じられる。「彼に聞けばきつとわかるよ。なにしろ(とにかく)彼は物知りだからね。」／「私は男女共学に賛成です。自然ですからね。大体この世には男と女というものが存在するんです。」
- 9) ラテン語 *quippe, enim* はギリシア語  $\gamma\acute{\alpha}\rho$  の訳として現われるが、(21) のようにギリシア語で  $\gamma\acute{\alpha}\rho$  が使われていてもラテン語ではそれが無視されている場合もあることに注意。

## For certes, for soothly, for truly, etc.

—Its Structure and Meaning—

Kenji Kondo

In Chaucer we often find the combinations, *for certes*, *for soothly*, etc. at the head of a sentence. For example:

And forasmuche as a man may acquiten hymself biforn God by penitence in this world, and nat by tresor, therfore sholde he preye to God to yeve hym respit a while to biwepe and biwailen his trespas. ①For certes, al the sorwe that a man myghte make fro the bigynnyng of the world nys but a litel thyng at regard of the sorwe of helle. The cause why that Job clepeth helle the lond of derknesse; understondeth that he clepeth it “lond” or erthe, for it is stable, and nevere shal faille; “derk,” for he that is in helle hath defaute of light material. ②For certes, the derke light that shal come out of the fyr that evere shal brenne, shal turne hym al to peyne that is in helle; for it sheweth him to the horrible develes that hym tormenten. “Covered with the derknesse of deeth,” that is to seyn, that he that is in helle shal have defaute of the sighte of God; ③for certes, the sighte of God is the lyf perdurable. “The derknesse of deeth” been the synnes that the wrecched man hath doon, whiche that destourben hym to see the face of God, right as dooth a derk clowde bitwixe us and the sonne.—Chaucer, *C.T.*, I. 173-84.

The three *for*'s in the above underlined parts are conjunctions or prepositions? Or what else? They are probably not prepositions because *certes* is not a noun but an adverb. If they are conjunctions, they are coordinate conjunctions and express the reason, basis or ground for the preceding statement. Taking the contextual meaning into consideration, the *for* in the underlined part ① is possible to be taken as such, whereas the other *for*'s in ② and ③ are not. In the case of ③, “for certes, the sighte of God in the lyf perdurable” can be paraphrased in Modern English like “though the sight of God is certainly life everlasting” or “which is certainly life everlasting.”

The *for* in question may have functioned as an intensifier, meaning ‘very’ or ‘truly’ like the following:

And he fór eft Iordanen, to ðære stówe ðe Iohannes wæs and árest on fullode—  
A.-S. Gosp., *John* x. 40.

I payed for hard mete ever to hym—1481-4 *Paston Letters*, 975. (ed. J. H. Gairdner)

The *for* in the following quotation probably has the same origin:

His longe heer was kembd bihynde his bak; As any ravenes fethere it shoon for blak—Ch, *C.T.*, A. 2142-4.

The meaning of *for* in question as an intensifier is clearly recognizable in the quotation from the Bible:

Ye shall not thynke that I am come to disanull the lawe, or the prophets; no I am nott come to disanull them, but to fulfyll them. For truely I saye vnto you, till heven and erth perisshe, one iott, or one tytle, of the lawe shall not scape, tyll all be fulfilled.—Tyndale, *Matt.* v. 17-18.

Cf.

A.-S. Gosp.: . . . Soþes on eornost ic secge eow . . .

Wycliffe: . . . Forsothe I say to 3ou trewthe, . . .

AV: . . . For verily I say unto you, . . .

RSV: . . . For truly, I say to you, . . .

NEB: . . . I tell you this: . . .

Greek: . . . ἀμὴν γὰρ λέγω ὑμῖν, . . .

Vulgate: . . . Amen quippe dico vobis, . . .

“For truely” in Tyndale, “For verily” in the Authorized Version (=AV) and “For truly” in the Revised Standard Version (=RSV) are derived directly from the Greek “ἀμὴν γὰρ.” The Greek ἀμὴν always means ‘truly’, whereas γὰρ has two meanings, one as a coordinate conjunction ‘for’ and the other as an intensifying word ‘truly.’ So, it is difficult to decide whether the *for* translated from γὰρ functions as an conjunction or an intensifier. But if we take account of the context of the passage, it is most probably an intensifier.

The Latin *quippe*, translated from the Greek γὰρ, has also two ambiguous meanings ‘for’ and ‘truly.’ But it is clear from the above quotation that the translator of the Anglo-Saxon Gospels (=A.-S. Gosp.) and Wycliffe understood it as an intensifier when they made a translation into English. Incidentally, as the New English Bible (=NEB) shows, *for* as an intensifier is now out of use.